

紅口

岡松和夫



口

紅

岡松和夫

著者略歴

岡松和夫 おかまつ かずお 昭和6年福岡市に生まれる。東大国文科卒。昭和34年「壁」で文藝界新人賞を受賞。その後、雑誌「近代文学」に作品発表。同人誌「犀」しかぶ「失羅」に参加。

昭和51年「志賀島」で芥川賞受賞。昭和61年には「異郷の歌」により新田次郎文学賞を受けている。

主な著書に、『小蟹のいる村』『深く目覚めよ』『鉢をかすく女』『純粹な生活』『楠の森』『詩の季節』『魂ふる日』等がある。

口紅 くちべに

昭和62年4月8日 第1刷発行

著者 岡松和夫

発行者 野間惟道

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―二二二／郵便番号一一二
電話東京(〇三)九四五―二二二(大代表)

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 大製株式会社

定価 一四〇〇円



落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取替いたします。

© Kazuo Okamatsu 1987 Printed in Japan

目次

野の花

5

口紅

35

清貧

67

雛

93

占領時代

141

栗鼠

179

嚮導

219

あとがき

244

口

紅

装
幀
司
修

野 の 花

今年の夏、瀧井孝作全集が私の手元に来た。同じものが既に私の方にもあったのだが、新しい方のものは特別な値打をもっている。全巻の見返しに瀧井さんの俳句が書きつけてある。もともと妻の母親のものだが、母親が亡くなって、私が預らしてもらうことになった。

瀧井さんは昭和五十四年十二月の全集完結の後、妻の母親が営んでいる阿佐ヶ谷の和菓子屋に来て書いてくれた。万年筆の、例の強く押しつけるような、すごい字体である。その頃、瀧井さんはすでに足が弱っていて、駅から近い店へも途中休み休みであったという。お孫さんが付添って、一休みするための折りたたみの小椅子持参だった。母親は感激して、全集を入れた紙箱の表に次のように書きつけていた。「瀧井孝作先生全集二箱 全集全部へ句を書き入れて下さった事を感謝する」

私はこの全集が届けられた夜、全冊を箱から出し、瀧井さん好みらしい藍染め布装の表紙をめくってみた。前に一度見せてもらった時とは違う、懐しい気持になった。前の時は、瀧井さんも妻の母親も健在だったのだから。

私は瀧井さんの万年筆の文字を原稿用紙に書き写した。真似たくなる強い字体だ。それに、私の好きな句もある。

夜寒だ

友の家の

友のしつくりした奥さん

孝作

私はこの句が好きだった。私の小説は時どき古風という評を受けるが、この俳句のような質樸な味わいを持つことができるなら、どう言われようと文句はないような気がする。

妻の母親は去年四月八十歳で亡くなった。私は昭和三十二年二月に結婚しているから、二十七年以上母親と付き合ってきたことになる。この母親は妻にとっては本当は継母にな

る。戸籍の上では母子の関係もない。しかし、本当の母親は妻が二歳の時に亡くなっているのだから、育てたのは継母ということになる。しかし、妻の側から言わせると、親子の情愛は深くはなかった。

私が妻と知り合った時には、妻は当時西荻窪にあった母親の店で働いていた。母親が丁度今の妻ぐらいの齢である。義理の関係にある親子によくあるように、二人の仲はしっくりしていなかった。私はそんな関係のなかに加わっていったのだが、この世間普通と違う親子関係を極端に重大なものとは思わなかった。妻が家を出て私と暮し始めれば、一切が解決するではないか。妻が実家とどの程度に付き合うかは自分で考えればよいと思った。

そんなわけで、私は母親の希望するキリスト教会で式を挙げ、そのまま勤め先の学校のある横浜へ妻を連れていった。

丁度店が西荻窪から阿佐ヶ谷に移る時期だったし、忙しくしている母親を見捨てるようにして妻は家を出たのだから、母親は怒っていたらしい。しかし、母親は私の方に苦情を言わなかったし、私は知らんぷりだった。ただ「この娘^このことは、あなたに皆おまかせしましたからね」と言われた時には、もう縁を切ったということかと思ったりした。

しかし、結婚で縁が切れたというのでは全くなかった。妻は時たまは実家に遊びに行っ

たし、弟や妹たちも私たちのところに遊びにきた。弟や妹たちは母親の実子である。

私の目から見て妻と母親がほぼ普通の親子関係になったのは、母親が乳癌の手術をしてからだろう。昭和四十二年の十月に手術をした母親は、翌年の夏七月から九月まで約七十五日を金沢八景の私の家で過した。阿佐ヶ谷の店は中央線の線路ぎわの立て込んだ商店街のなかにあったし、夏の間弱った体で風通しの悪い店の二階に寝起きするのはつらいと思ったのだらう。私も母親という人物をつくづくと観察することができた。

妻から聞いていたことだが、母親は昔から料理に手を出したことがないという。昭和二十五年に菓子屋を始めてからは、店に出て菓子を売ることが母親の仕事だったから、料理など億劫になってしまったのかもしれないが、そんな遠慮がちな言訳など決してせずに、食事時になると、でっぶりした体で食卓の前に坐った。キリスト教の信仰のあることが我慢だったから、まず食前に無言で祈る。それからいつも楽しそうに食べ始めた。妻は母親の料理の好みを知っていたから、文句はないはずである。

話が好きで、声が大きく、よく笑う。昔は人を攻撃することもあって、一向になつこうとしない少女期の妻も犠牲者の一人だったようだが、そういう過去もけろりと忘れていく。こうしてゆっくりと夏を過せるのも神さまのおかげとは言うが、妻や私に感謝する言

葉はない。その辺りも、ちょっとした女の大物という気がした。

母親のキリスト教信仰は敗戦後から始まっている。それ以前のことは本人からは聞いたことがないが、親戚の話によれば、「日蓮さん」にも大分熱心だったという。「日蓮さんの頃に比べると、キリスト教になってから（気性が）大分よくなった」という批評も聞いた。

母親の信仰しているキリスト教は、日本人の一牧師によって創られた庶民的なキリスト教である。私と妻は母親の希望でその教会で結婚式をあげたのだが、信者たちの多くが大声をあげて祈るのには驚かされた。「ハレルヤ」を繰り返し、訳の分らぬ言葉が続く。日本語でも外国語でもない。それは「異言」なのだという。聖書にも、この言葉はあるそうだが。しかし、「異言を語る」教会というのは、多いものではない。牧師が静かに説教し、その後で会衆が大人しく祈る普通のキリスト教会から見れば、まず例外的な種類である。「異言」の出てこない信者は勿論静かに祈っているが、「異言を語る」信者の熱狂ぶりが会堂のなかを圧してしまう。

母親も異言を語る口だったし、私をこの教会の信者にできないものかとも思っていたようだ。しかし、私は敬遠し続け、うちで暮している頃には、もう殆ど諦めていた。まあ、

母親の信仰も落ち着いたものになっていたのだろう。その昔は、自分が「癒^{いや}しの御魂^{みたま}」をさずかっていると思い、病人に手を当てて祈ったりしていたらしい。そういうように、マリアもキリストも自分の両親か半身のように身近なものとして意識するのが、母親の特徴だった。

この教会の説く信仰は、かなり現世利益的である。それが商売をする母親に分りやすかった。祈れば必ずよい酬いが得られる。愛を施せば百倍も神さまは愛を返して下さる。母親はよくそう言っていた。その愛も、心情的なものと違って気前よく金を出したりすることを意味した。形がなければ、そうだと誰も分らないでしょう、妾は普通のおばあちゃんのように、孫を抱いたり、あやしたりはしない、妾の愛情はお金よ、などと言って私を面白がらせた。

私はキリスト教の話は極力避けた。それよりは思い出話に期待した。

妻の祖父になる人は木場の材木屋で、妻の父親は兄と一緒にその材木屋を継いでいたのだが、空襲で一切合財を失った。外に出て働いたことのない父親は、戦後の社会に妻子を養ってゆくだけの生活力がなかった。そこで、母親は菓子屋を思いたった。四十代の半ばだったという。母親の実家は上野にある名の通った和菓子屋である。彼女は少女の頃から

両親を助けて店で働いた。それが戦後になって役に立ったことになる。

たとえ料理のような家庭的なことではできなくとも、夫に代って一家を支えてきたのだから、生活力はたいしたものだった。何事にも意欲的だった。六十を過ぎて乳癌の手術をしても、へこたれたところがない。高血圧症があるせいか顔は赫味を帯びていたが、老斑など少しも目立たない、活気のある、押しの強い老女である。その口はよく動いた。

二

母親は明治三十七年二月に横浜で生まれている。彼女の父は喜作、母はやすという名で、父は今の中区尾上町にろうそく店を出し、また別に、船具などを売る鈴木商店の支配人を兼ねていた。子供時代の思い出話は他愛がなくても仕方がないのが普通だ。彼女の場合も、よく家の仕事を手伝ったとか、近くの支那人町の男たちはまだ弁髪、女は纏足だったというような話である。纏足の女たちは油でかためた頭に銀の大きなかんざしを差していた。

しかし、喜作の厳しい躰が滲透してゆく様を聞くにつれて、普通の少女の顔が目の前の

母親の顔になってゆく。坐った時の姿勢がいいのは小笠原流の礼法の稽古に通わされたから、などと母親は言った。

妻は小学校しか出ていないけれど、父は厳しかったし、妾も負けず嫌いだったから。母親はそれから、喜作が横浜から移って上野黒門町に開いた和菓子屋の話を始めた。骨董屋を改造した小さな店だったそうだが、趣味人の喜作は口上書や額や掛軸など、店を飾る文字を傾倒していた河東碧梧桐に一切頼んだらしい。それに、菓子職人の神さまといわれた松田某に指導してもらって、皮の薄い最中を作り出し、喜作最中と名づけて売り出した。喜作は大正三年にこの店を始め、五年ばかりで亡くなるが、この最中は次第に人気が高まり、大震災後は店頭に人だかりがするほどになった。

喜作という大黒柱を失った店は、やすや子供たちによって支えられた。妻の母親は黒門小学校を卒業するとすぐから兄と共に店を手伝い、父を看病し、弟や妹の面倒をみたらしい。母のやすは女手で店を切り廻したから、長女の彼女が面倒みなければならぬ分野は広かった。この頃の店のことを知っている瀧井さんは、彼女が十五六の少女でありながら、しっかり者であったことを『無限抱擁』のなかに書きとめている。

兄はね、あたしのことを、後ろ弁天、前不動って言ったのよ。母親はそう言って笑っ